

第1章 点字・点訳の基礎知識

その6 点訳・校正の位置づけ

1. p14 3. 調査

「逝く」の読み方について「ゆく」と読みますが、

- ・ 苦しみながら逝くのでは～
- ・ 逝けたので～
- ・ 逝ってしもうたんや
- ・ 穏やかに逝った

など「いく」と読む箇所と「ゆく」と読む箇所が混じっている場合は、「いく」と読んでもいいのでしょうか。1タイトルで統一と考えていいのか、本来の読み方で「ゆく」と読む箇所は「ユク」と点訳するのでしょうか。

「あり得る」についても「Q & A」調査のなかで「本来の読みのありうると読みます」とありますが、「ありえない」があった場合でも「あり得る」は「ありうる」と点訳しますか。

【A】

ご質問の場合は、動詞の活用の変化になりますので、「ゆく」「いった」「ありうる」「ありえない」は、読みを統一していることになります。

「逝く」は「ゆく」と読みますが、連用形の音便の形になると「イッ」となります。

「行く」も「ゆく」とも読みますが、連用形の音便では「ゆった、ゆって」とは言わず、「いった、いって」になります。

活用の形は「ゆか・ゆこ、ゆき・いっ、ゆく、ゆく、ゆけ」と変化します。

ですから、

- ・ 苦しみながら■ゆくのでは～
- ・ ゆけたので～
- ・ いって■しもうたんや
- ・ 穏やかに■いった

と読みます。国語辞典の後ろにある「動詞の活用表」をじっくり見ていただくと、※などのマークが付いて、説明があると思いますので、参照してください。

「Q & A」にも書きましたように「得る」は現代語では「える」と読みますが、「あ

りうる」「かんがえうる」などのように動詞の連用形に続いて「～ことができる」の意味で、「うる」と読んだときには、現代の口語の形ではなく、文語の形で活用します。「え え うる うる うれ えよ」となります。

「ありうる、ありえない、考えうる限り、言いえて妙だ」のように用います。
ですから、「ありうる、ありえない」と読みます。

2. p14 3. 調査

「家」を「いえ」と読むか、「うち」と読むかの読みわけについてです。

「いえ」は「ハウス」、「うち」は「ホーム」の意味で使い分け、改まった言い方ではない会話文の時は「うち」と読んだ方がしっくりする事が多いように思っています。

よく店に来る廃品回収業の男性に、壊れた自転車を回収してもらえるかどうかを聞く会話文です。

「できるけど、どこにあります？」

「家なんですけど」

「家、どこです？」

という文で、私は単純に会話だからと考えて「うち」と点訳してしまいましたが、よく考えてみたら住所を訪ねている訳で、やはり「いえ」と読んだ方がいいのではと思い始めました。

また、家出をした人のことをいう時、

「息子は家にいないんです…」

「家を出たんです」

という文ですが、やはりこちらも「いえ」と読んだ方がいいのでしょうか。

【A】

確かに、お考えの通り、「いえ」は「ハウス」、「うち」は「ホーム」の意味で使い分け、改まった言い方ではない会話文の時は「うち」と読んだ方がしっくりする事が多いと思います。

『NHKことばのハンドブック』にも《原則として「いえ」は建物を指す場合、家庭を指す場合は「うち」》と書かれています。

ただ、常用漢字表を見ると「家」は「カ・ケ・いえ・や」と読み、「うち」の読みは入っていません。国語辞典の中には、「内」の見出しに《自分の家・家庭を指す場合は「家」とも書く》とある辞典もありますし、ほとんどの辞典で「いえ」の項では、

1 番目は「人が住むための建物」の意味ですが、次に「我が家、家庭」の意味も入っています。

このようなことから、会話文かどうかや文脈によって、「家」を「うち」と読むこともあります。明確な使い分けはできず、迷った場合は「家」本来の読みである「いえ」を選択するのがよいと思います。

3. p14 3. 調査

「市場」の読み方についてお尋ねします。

「築地市場」は「つきじしじょう」と読むと思いますが、そのあと 市場に出入りする人たちが……。午前6時だったら市場ではちっとも早い時間ではない。といった文があります。この場合、「つきじしじょう」に合わせて「しじょう」と読んだ方がよいのでしょうか。それとも「いちば」でよいのでしょうか。

【A】

「いちば」は、毎日または定期的に多数の商人が集まって、商品売買を行うところ、「場所」を言い表す場合で、

「しじょう」は「経済的な機能」を言い表す場合に使うようです。

いちば・・・ 魚～ 青物～

しじょう・・・ 売手～ 買手～ 卸売～ 青果物～ ～価格 ～経済 ～調査

ただ、「場所」を表す場合にも固有名詞では「しじょう」と言うところもありますので、その読みに合わせることになります。

東京都のホームページでは、中央卸売市場にはすべて「しじょう」とルビがありますし、アルファベットで「sijou」と書いてありますので、築地市場や豊洲市場は、「ツキジ■シジョー」「トヨス■シジョー」のようです。

ただ、ネット販売のトヨスドットコムは、トヨス■イチバ、ツキジ■イチバとなっています。

ご質問の原文の場合、「市場に出入りする人たちが……。午前6時だったら市場ではちっとも早い時間ではない」は「シジョー」と点訳してよいと思います。

4. p14 3. 調査

「乳母」は、一般的には「うば」と読みますが、時代物は「めのと」と読んでもいます。今、点訳中の本では「乳母夫」にルビが「めのと」と出ていて女性の乳母にはルビはありません。女性の乳母に「めのと」、夫の乳母夫に「めのとぶ」と読んでよろしいのでしょうか。「乳母夫」のルビを「めのと」と読むなら女性の乳母は「うば」ですか。迷っています。

【A】

「乳母」も「乳母夫」も「めのと」と読みます。

殆どの場合、それでよいと思いますが、前後の文脈で判断できなくて、しかも、判断しなければならない場合には、(オット)(オトコ)などと補足するのがよいと思います。

「父子」「母娘」「父娘」などを、すべて「オヤコ」と読むのと同様の処理になります。

5. p14 3. 調査

「方」の読みで「カタ」か「ガタ」で迷っています。「役目は公用方」はコーヨーガタでしょうか。

【A】

「方」は「かた」とも「がた」とも読みますが、接尾語的に用いる場合で連濁しても用いられることもあるのは

(1) 数量や時を表す名詞について、それくらい・そのころを示す。「暮れ方」「朝方」「5割方増し」

(2) 動詞の連用形や名詞に付いて、必ず相手方があると予想される場合の一方の側を表す。「母方」「敵方」

のようです。

組織内の係や担当を表す場合は連濁しないようです。「囃子方」「道具方」「公用方」は「ハヤシカタ」「ドーグカタ」「コーヨーカタ」と読んでよいと思います。

6. p14 3. 調査

「瞬く」の読み方について

・堀田は眼を、瞬かせて俯いてしまう。

・人の数倍は瞬きをした。

「瞬く」は辞書を見ると「マバタク・シバタタク・マタタク」と色々な読み方が載っています。例文の時、私は「マバタク」と読みました。

しかし、この本はシリーズもので次の本には「眼を瞬(しばたた)かせてから～」とルビ付きの文が出ています。合わせた方がいいのでしょうか。

読み方のルールがあるのかも知りたいです。

【A】

「瞬く」の読みのうち「またたく・まばたく」と「しばたたく」は自動詞と他動詞の違いがありますので、用法も異なってきます。

「しばたたく」は他動詞ですので、目的語を必要とします。

シリーズものにルビがあったのは、「眼を瞬かせてから～」が、目的語(眼を)があるので、ここは「しばたたかせる」と読んでほしいということでルビがあったのだと思います。目的語がない場合、「星がしばたたく」「まぶしそうにしばたたく」は

不自然な読み方になります。

また、「しばたたく」は、「しきりにまばたきする」「何度もまばたきする」という意味ですので、単に「まばたく」より激しい様子を示します。

「またたく」と「まばたく」については、古語では「またたく」だけだったのですが、発音の変化から「まだたく」「まばたく」などの言葉がうまれたようです。

どちらも同じ意味ですが、「まばたく」は「人間や動物だけ」と限定する立場をとる辞書も多くあり、「星がまばたく」とは、あまり言わないと思います。

これらから、

人間や動物には、「またたく・まばたく」どちらも用いる。

星や町の灯などは、「またたく」としたほうが自然である。

「しばたたく」は、「またたく・まばたく」より頻度が高い様子を表し、目的語があるときにのみ用いる。

とすれば、自然な読み方になると思います。

なお、目的語があっても「目をまばたかせる」などの言い方はあります。

7. p14 3. 調査

料理に関する用語の読みについて

塩味（シオアジ、エンミ、シオミ）

甘味（カンミ、アマミ）

を、読み分けた方がいいでしょうか。

- ① 素材の味を活かした塩味の料理と合う。
- ② シラスの仄かな塩味。
- ③ 味噌や醤油と同じ発酵調味料で、塩味に発酵による甘味や旨味が加わっている。
- ④ 辛味と甘味で食べ飽きないようになってる。

【A】

しおあじか、えんみか、あまみか、かんみかについては、区別が難しいのですが、栄養学や生理学、家庭科などで、食材そのものが持っている味、「基本味」を指す場合は、「塩味（えんみ）」「甘味（かんみ）」「酸味（さんみ）」「苦味（にがみ）」「辛味（からみ）」「旨味（うまみ）」と読み、中学・高校などの教科書でもそのように習います。

その影響もあってか、最近では、味付けの意の「しおあじ」のことも「えんみ」という言い方が広まってきたと言われています。

「甘み」の場合は、「み」をひらがなで書いたときに「あまみ」と読むのが本来の読み方のようです。

ただ、食材本来の味か、味付けの意味かの読み分けは難しく、実際にはどちらなの

か判断が付かない場合も多いと思いますので、はっきり分からない場合は、1タイトルの中では読みを統一した方が読みやすいと思います。

①は「しおあじ」と思いますが、②～④は、すべて、えんみ、かんみ、うまみ、からみと読んでよいと思います。

8. p14 3. 調査

「何」を「なに」と読むか「なん」と読むかの違いはどう考えればよいでしょうか。

例：「何に対して怒っているのか？」

この場合はどちらでしょうか。

【A】

国語辞典によると、《「ナン」は「ナニ」の音便形で、主に助詞・助動詞の「だ、で、と、の、なら、なり」に続くとき、そのほか「に、か」に続く時にも用いられ、多くは話し言葉で用いられます。》と説明があります。

音便ですので、後ろがタ行・ダ行・ナ行の助詞・助動詞が来るときに、話し言葉で用いられると考えてよいと思います。

ですが、最近では、「ナンカ」もよく使われます。

常用漢字表では、「ナニ、ナン」ともに「何」の訓読みとしてあげられていますので、どちらで読んでも間違いではないと思います。

ただ、「ナン」の例としては「何本、何十、何点」など「いくつ」の意味だけが挙げられています。

『NHK新用字用語辞典 第3版』には、「ナン」という読み方は「特別なものか、または用法のごく狭いものである」というふうに書かれています。

これらのことから、点訳では、「ナニ」を基本に、話し言葉、会話文の中で、音便として使われているような場合は、「ナン」の読みを用いるのがよいと思います。

また、接頭語として数量・時間・順序・程度などを表す場合は、「ナン」になります。

ご質問の例として挙げられた「何に対して怒っているのか？」は、

「ナニニ■タイシテ■オコッテ■イルノカ？」が基本的な点訳方法だと思いますが、辞典にもあるように、「ナンニ■～」の言い方もありますので、校正としては指摘の対象から外してよいと思います。

9. p14 3. 調査

「一時」を「イチジ」と「イットキ」と読み分けるルールはありますか。

【A】

国語辞典によると、「いちじ」と「いっとき」は以下のように、ニュアンスが少し異

なります。どちらにも読まれる場合もありますが、後ろに付く助詞も考慮して文脈にあう読みを選ぶことになると思います。

「いちじ」は

①ある限られた長さの時間、一定時間 「出発をいちじ見合わせる」「晴れいちじ曇り」「いちじ預かり」

②（何かが起こった途中の）ある時期、あるとき 「いちじはだめかと思った」「いちじはどうなることかと思った」

③そのときだけ、そのとき限り 「いちじの気の迷い」「いちじの間に合わせで乗り切る」「いちじのできどころ」

④一度、一回

一時金（いちじきん）、一時帰休（いちじききゅう）、一時しのぎ（いちじしのぎ）、一時的（いちじてき）、

一時払い（いちじばらい）、一時逃れ（いちじのがれ）

「いつとき」は

①少しの間、しばらく、片時 「いつときも休めない」「いつときのひまも惜しむ」「いつときの辛抱だ」「いつとき逃れ」

②ある一時期 「いつときほどの元気はみられない」「いつとき流行っていた」

③昔の時間区分 一刻 約2時間のこと

なお、防災用語では、「一時避難場所」は「いつときひなんばしょ」（防災用語辞典、東京都のHP）と読む方が主のようです。「一次避難場所」との区別のためです。

10. p14 3. 調査

「神宝」の読み方について

『知れば知るほどおもしろい「日本の神様」の秘密』の原本に以下のようにあります。

天皇は出雲の神宝を見てみたい、といい出した。そこで武諸隅なる人物を出雲に遣わし、神宝を献上させることにした。このとき神宝を管理していたのはイズモノオミ(出雲臣)。

弟のイイイリネ(飯入根)が、ヤマトのいうとおりに、神宝を差し出してしまった。

「ヒスイ」は・・・ワタツミの神宝と考えられたのである。

草薙剣は出雲からもたらされた神宝ということになるが・・・

最初《しんぼう》と読んでいましたが、ふと気になり、

【神宝】を調査すると、以下のようにありました。

①広辞苑第7版

「かむだから」も「しんぼう」も見出し語にある

②三省堂国語辞典第八版

「しんぼう」のみ

③ネットでのgoo辞書

「神宝」で検索すると以下のような順序で出てきます

かむ - だから【▽神宝】の解説…《「かんだから」とも》

かん - だから【神宝】⇒かむだから

しん - ぼう【神宝】の解説…

④明鏡国語辞典

「しんぼう」のみ

⑤ネットのコトバンク

「かむだから」も「しんぼう」も「かんだから」「かんだから」もある

⑥旺文社古語辞典

「かむだから」

③の順序性を考慮すると《かむだから》と読むのがいいのかと迷っています。

【神宝】はどう考えたらよいのでしょうか。

【A】

種々の国語辞典を調査してみますと、「しんぼう」が現代の基本的な国語辞典をはじめ、中型の辞典にも収載されています。そして、（～とも）の形で、「じんぼう」「じんぼう」「かんだから」「かんだから」「かむたから」「かむだから」などが紹介されています。

日本の国語辞典で最も大きい小学館の「日本国語大辞典」では、「かんだから」も見出し語として収載されています。

「日本国語大辞典」では、「しんぼう」の項には、延喜式をはじめ、800年代、900年代から1600年代、1700年代まで広い年代にわたる用例が挙げられています。

「かんだから」の項では、日本書紀、延喜式、源氏物語の3例で比較的古い時代の用例になっています。

「しんぼう」に対して「かんだから」は和語読みですので、源氏物語のように和語で文が構成されている読み物では用いられやすいと思います。

ご質問の文は、古典の引用部分ではなく現代語で書かれた文ですので、現代の多く

の辞書で採用されている「しんぼう」の読みが適していると思います。

日本書紀などの引用文にある場合は、前後の文脈から、和語読みが適しているとは判断されるときは、「かんだから」と読む方がよい場合もあるかも知れません。

なお、ネットの辞書である「goo辞書」は国語辞典に関しては、「デジタル大辞泉」とほぼ同じです。

コトバンクはネットを横断検索してヒットした結果が書かれていますので、それぞれの出典の性格や信頼性などを確認の上、読みを選択する必要があります。

このような日本古来の語の読みに関しては冊子の、基本的な辞書（岩波・三省堂・新明解など）⇒ 中型辞書（広辞苑・大辞林・大辞泉など）⇒ 大型辞書（日本国語大辞典）の順に、用例も読みながら調査するのがよいように思います。

11. p14 3. 調査

言語の音、「はひふへほ」の音が

上のような場合は、「おと」「おん」どちらで読むのがよいのでしょうか。

【A】

「おと」「おん」の区別はあいまいですが、国語辞典には「人間が言語として使うために口で発するおと」は「おん」と読むと書かれていますので、ご質問のばあいは、「オン」と読むのがよいと思います。

12. p14 3. 調査

「行き場」「行く先々」の読みについて

「てびき3版 指導者ハンドブック 第2章編」p10に《次のような語は常に「ゆく」が使われ、「いく」とは読まれませんので注意しましょう。国語辞典を見ても、「ゆく」が本来の読み方である》とあり、その中に「行き場（がない）」があります。点訳フォーラムの語例で調べると、「イキバガ■ナイ」となっていて注記として「ユキバとも」とあります。ハンドブックとの違いはなぜでしょうか。「イキバ」と読んでいいとしても、なぜ「ユキバ」の方が注記になるのでしょうか。

「行く先々」もなぜ「イク」も可になっているのでしょうか。

【A】

語例集の場合は「話の持って行き場がない」ですので、「持って行く」に「場」が付いた形です。この場合の「行き」は補助動詞ですので、単独の「行き場」と異なり、「いき」と発音することも多いと思います。そのために「読み」を「いきば」とし、注記に「ゆきば」を付けました。

「行く先々」も、「行く」という動詞の意味が強く、「行く■先々」とマスあけしますので、注記はそのままにしたいと思います。

13. p14 3. 調査

アルコール依存症はフォーラムでは、「アルコール■イゾンショー」となりますが、ほかで検索すると、「イゾンショー」とでます。NHKも読み方の優先順位を変えたそうですが、どちらがいいですか？

【A】

「アルコール■イゾンショー」が本来の読みですので、点字では「イゾンショー」でよいと考えています。

NHKでは、話し言葉として、「いぞん」という人の割合が多くなったために、2014年以降、「依存、共存、現存、残存、併存」の読みの優先順位を「ぞん」を1.にし、「既存」は優先順位なしにしていますが、点訳では国語辞典を元に、これらの語は「そん」と読むことをお勧めしています。

ただ、言葉は時代と共に変わりますので、国語辞典でも「ぞん」が見出し語になれば、点訳でも変わっていくかもしれません。

14. p14 3. 調査

「世論」の読み方について

- ・世論は「原発反対、放射能は危険だ」と身体の危険を心配してくれます。
- ・このような世論にも傷つき苦しんでいます。

この場合は「ヨロン」「セロン」どちらでしょうか。

「岩波国語辞典」は、「よろん（輿論・世論）」には「__調査・__に聞く・__に訴える・__が高まる」と語例があり、

「明鏡」は、「せろん（世論）」には「__の動向を調査する」がありました。

辞書の説明を読んでも違いがはっきりとしません。「世論」はどちらで読んだらいいのでしょうか。

【A】

すでに調査されているように、「世論」は「せろん」としても「よろん」としても辞書に記載されています。そして、よく似た意味でどちらで読んでも間違いではないように思われます。

元々、「せろん」「せいろん」は「世論」、「よろん」は「輿論」と書いて、微妙に意味が異なっていたのが、「当用漢字表」が実施され「輿」の漢字が当用漢字表にないことから、「よろん」も「世論」と表記されるようになり、現在のような状況になったようです。

国語辞典によってはなかなか判断しにくいのですが、それでは、どちらで読むのが適切なのでしょうか。

平成15年度に文化庁が行った世論調査では「よろん」と読む人が73.8%、「せろん」

と読む人が18.9%と、「よろん」の方が浸透していることが分かります。

また、『NHKことばのハンドブック第2版』では、「よろん」を○、「せろん」を×にしています。

これらのことから、一般的には「よろん」の読みが定着していると言えそうですので、現状では、「よろん」と読む方が、自然ではないかと思います。

15. p14 3. 調査

芥川龍之介の「地獄変・偷盗」の中に、「青空の下、夜空の下、月の下」と出て来ます。ネットで調べると「青空の下」は、「もと」と分かりました。夜空と月は、「もと」と思うのですが確信が持てません。

【A】

「下」を「もと」と読む場合もあります。

「もと」と読む場合は、「上に広がるものに隠れる範囲、影響を受ける範囲」の意味になります。「白日の下にさらされる。」「教授の指導の下に研究を進める」「法の下に平等である」などと用います。

「青空の下」は必ず「もと」と読むわけではなく、「澄み切った青空の下、運動会が行われた」という場合は、「青空＝好天」という恩恵に恵まれて「運動会」が無事に、中止にならずに開かれるという意味になります。

「彼は青空の下、高いところを悠々舞っている鳶の姿を仰ぎ、人間の考えた飛行機の醜さを思った」（暗夜行路）という場合は、単に位置関係の「した」を表しているので「した」と読みます。（文化庁『言葉に関する問答集』の例）

それによって、何らかの影響力、支配力を受けている場合は「もと」、位置関係の「した」の場合は「した」と読んでよいと思います。

これらのことから「偷盗」の、

「夜空の下」は「～大路小路の辻々にも、今はようやく灯影が絶えて、内裏といい、すすき原といい、町家といい、ことごとく、静かな夜空の下に、色も形もおぼろげな、ただ広い平面を、ただ、際限もなく広げている。」

「月の下」は、「が、周囲は、どこを見ても、むごたらしい生死の争いが、盗人と侍との間に戦われているばかり、静かな月の下ではあるが、はげしい太刀音と叫喚の声とが、一塊になった敵味方の中から、ひっきりなしにあがって来る。」

とあり、支配下、影響力の意味では無く、単に「そのしたで」という意味ですので、「した」と読んでよいと思います。

16. p14 3. 調査

気色には「キショク」「ケシキ」と、二通りの読みがありますが微妙な違いがあるように思うのですが、次の場合点訳者はいずれも「キショク」と読んであります。

- ①殿は何をお考えかと訝る気色も見えます
- ②汚れたまま駆け付けた振る舞いを銜って誇る気色もない
- ③城内に奇妙な気色が漂い、本当に喜んでいいものか…

【A】

基本的な小型の国語辞典を見てみると

「きしょく」は、

「心に思っていることが顔に表れた、その様子、顔色、気分」(岩波国語辞典)

「見たり触ったりしたときの鳥肌がたつような気持ち、気分」(三省堂国語辞典)

「(顔に表れている) 快・不快の状態」(新明解国語辞典)

「けしき」は、

「何かしようとする、また、何か起ころうとする、(ほのかな) 様子」(岩波)

「何かが起ころうとする気配 顔色や態度に表れる心の様子」(三省堂)

「その人の態度・表情などに現れる、そのときの心の状態」(新明解)

となっています。使用例としては

「きしょく」は、きしょくがいい、きしょくがわるい、きしょくを害する

「けしき」は、応じるけしきがない、雨があがるけしきがない、けしきを伺う、けしきを帯びる、けしきを見せる、けしきを見て取る

などとなっています。

以上のことから判断すると、①②③ともに「けしき」と読んだ方が適していると思われる。

17. p14 3. 調査

「二十歳」の読み方について

「結婚した二十歳代初め頃から」の場合は「ハタチダイ■ハジメゴロカラ」なのか
「数符20サイダイ■ハジメゴロカラ」なのか、

辞書に「はたち《二十》《二十歳》語法：二十歳そのものを言う語。年数の意のときは[はたち]を使うのではなく、『二十歳(にじっさい)も違う』『二十(にじゅう)代の若者』としたい。」とありましたが悩んでいます。

【A】

「二十歳・二十」を「はたち」と読むのは、常用漢字表に熟字訓として示されています。国語辞典では、「はたち」は「二十歳」を表すのが主な意味で、「二十」は雅語、昔の表現などと書かれていますので、現在では「二十歳」だけを「はたち」と読むのが適切ではないかと思います。

一方、「二十歳、20歳」と書いて、「にじっさい、にじゅっさい」と読むのも間違いではありません。

「二十歳代」の場合は、はたちだけでなく、21も22も29まで指しますので「数20

サイダイ」と書いた方がよいと思います。

18. p14 3. 調査

「難治」は点訳フォーラムで「なんち」となっています。一般の辞書をみると「なんじ」の方に語意が書いてあるのですが、この読み分けはあるのでしょうか。

【A】

国語辞典では、ほとんどすべての辞典で「なんじ」の読みに語義が載っていますが、医学的には「難治性～」の病名は、すべて「なんちせい～」で、医学辞典では「なんち」となっています。

「難治疾患研究所」も「なんち」の読みが示してあるサイトもあります。これらのことから、医学分野では「なんち」と読むのがよいと思います。ただ、「難治」には、「治めにくいこと」や「難しいこと、難題」などの意味もありますので、このような意味の時には「なんじ」の読みの方がよいと思います。

19. p14 3. 調査

時代小説の中で、「帯陣が長引くようなら」と書かれているところの「帯陣」は何と読むのでしょうか。

【A】

「たいじん」と読んでよいと思います。

根拠としては、

1. 国語辞典などを調査しても「帯陣」は見当たりません。が、「滞陣」（一定の所に陣をおいてとどまること）はあります。

文脈から、「滞陣」（たいじん）と同意ですので、この意味で「帯陣」が用いられたとも思われます。

2. ネットで調べてみると、

諸葛亮孔明 漢王朝の復興を目指し、魏に戦いを挑んだ蜀の宰相

劉備が夷陵で敗北する

帯陣が長引き、陣が長大になって防備が薄くなった隙を陸遜（りくそん）につかれ、大敗を喫します。

という表現がありました。「三国志」などの記述をもとにした読み物での表現のようです。中国文献の用語をそのまま用いている可能性もありますが、中国語の辞書（新華辞典第10版）で調べると、「帯」には「引率する」の意があり「領」と同義とあり、「領」を見ると「領陣」の用例がありましたので、「帯陣」で陣を引率するという意味のようです。

陣を引率することが長引き・・・であれば、結局意味は滞陣と同じことになります。中国語から持ってきた表現であれば漢字音読みをするのが自然ですので、「たいじん」

がよいと思います。

ご質問の時代小説が中国ものかどうかは不明ですが、同様の表現を日本の時代小説でも用いた可能性はあると思います。

20. p14 3. 調査

一般書のエッセイなどに、「(笑)」という言葉が、文末によく出てきます。

ワラ、ワライ、カッコ■ワライ

など読み方はあると思うのですが、点訳での読み方統一はありますか。

とくにない場合、よく使われる読み方はあるでしょうか。その図書の中で読み方が統一されていたらよいのでしょうか。

【A】

「てびき」や点訳フォーラムでは「ワライ」としています。

原本に読みの指定がない場合や迷う場合は「ワライ」でよいと思います。

読みの指定がある場合は、あまり不自然でない限りそれに従ってよいと思います。

21. p14 3. 調査

「いない間」を文脈によって、間（あいだ）と読んだり、（ま）と読んだりしてよいでしょうか。

- ・ いない間（アイダ）に見舞いにきたこともあったようだ。
- ・ 權がいない間（マ）に店から抜け出している。

「シラヌ■マニ」や「ミテ■イル■マニ」などがありますが、見舞いの方は（ま）ではないような気がします。

【A】

「いない間」を文脈によって、「イナイ■アイダニ」と読んだり、「イナイ■マニ」と読んだり、自然な読みの方を採ってもよいと思いますし、校正でも指摘の対象とはならないと思います。

「ま」と「あいだ」は、語源的には、「ま」が、「時間的・空間的に持続・連続している中にある必要な欠落部分」を指し、関心の中心が一つの持続としてとらえられるのに対し、「あいだ」は二つの別のもののあいだ、原因と結果のように展開したあいだを示すのだそうです。また、「ま」は、雅語的であるのに対し、「あいだ」は漢文訓読的というイメージもあります。

現在では、このような使い分けは混乱していますので、神経質にならなくてよいと思います。慣用的な「しらぬまに」「まがわるい」などの使い方に注意すればよいと思います。

ただ、以上のことから考えると

- ・ いない間（アイダ）に見舞いにきたこともあったようだ。

・ 權がない間（マ）に店から抜け出している。
は、もともとの意味の読み分けに雰囲気的に合っているように思われます。

22. p14 3. 調査

「人」の読みについて、「じん」と「にん」の読み分けについて教えてください。
また、「同一人」は「ドーイツニン」と読んでよいでしょうか。

【A】

「どういつにん」と読んでよいと思います。

「人」を「じん」と読むか「にん」と読むかについては、点訳フォーラムのブログ（2022年1月1日）「辞書を楽しむ」に記載しましたので、参考にしていただきたいと思います。この読み分けの基となった研究やその追跡研究で、「ニンは数詞と結合し、ジンは地名と結合する。その逆はない」と述べられています。

「同一人」は「どういつにん」と読むのが適切ということになります。

23. p14 3. 調査

「憤怒」の読みについて、原本に以下の文があります。

「悲しみに浸る余裕もないほどに、憤怒に支配されているようだった。」

これは、普通の文章で、【ふんど】と点訳したところ、【ふんぬ】と校正がありました。複数の辞書で調査すると、【ふんぬ】に説明がある辞書のほうが多い状況でした。このような場合は、【ふんど】は間違いで、多数決で多いほうの読み方を選んでよいでしょうか。

「開け放し」の読み方について、

「廊下の突き当りまで進んだところの部屋の扉が開け放しになっている。」

「そう思っていると、不意に、洋一郎がダイニングの開け放しの扉の前に現れた。」

調査すると【あけはなし】【あけっぱなし】と辞書によっても違いがありますし、個人によって違いがありました。このような場合はどう読んだらよいでしょうか。

【A】

「憤怒」は「ふんぬ」「ふんど」両方の読みがありますが、小型辞典では「ふんぬ」のほうに語義があり、現代では「ふんぬ」の読みの方が多いと思います。「ふんど」に語義が掲載されている辞典もありますので、「間違い」とは言えないと思いますが、選ぶのでしたら、「ふんぬ」の方がよいと思います。

「開け放し」は、原本にこのように書いてあれば、「あけはなし」と読むと思います。

「あけっぱなし」と読ませたい場合は、「開けっ放し」となります。点訳フォーラム Q&A 第1章その6の現在の31.に「真白」「生粋」などの例がありますが、これらは送り仮名の省略と解され、国語辞典にも、「真（っ）白」のように書いてあります。

「開け放し」と「開けっ放し」は、送り仮名の問題ではありませんので、原本の通りに点訳するのがよいと思います。

24. p14 3. 調査

「いところ」の漢字を「従兄長男・従兄（次男）・従妹・従弟・従兄妹・従姉弟」と書き分けています。

ジューケイ■チョーナン ジューケイ（ジナン） ジューマイ ジューテイ
イトコ（アニ■イモート） イトコ（アネ■オトート）

と書くべきでしょうか。

イトコ■チョーナン イトコ（ジナン） イトコ（イモート） イトコ（オトート）

と書いてもいいのでしょうか。

前後の文章からきょうだい構成がわかるところ、わからないところ、入り交じっています。

【A】

文脈から兄弟関係が分かるところや、分からなくても文章を読むのに差し支えないところでは、すべて「いところ」と読んでよいと思います。

どうしても、兄、弟、姉、妹などが必要な場合は、

イトコ（ジューケイ） イトコ（ジューテイ） イトコ（ジューシ） イトコ（ジューマイ）
イトコ（ジューケイマイ） イトコ（ジューシテイ）のように第1カッコで補ってはどうか。

25. p14 3. 調査

「執着」の読みは「しゅうちゃく」「しゅうじゃく」どちらが良いですか。一般的には「しゅうちゃく」だと思うのですが。

「重用」は「ちょうよう」「じゅうよう」どちらでしょうか。

【A】

「執着」は、本来は「しゅうじゃく」で広辞苑や岩波国語辞典などその語の伝統的な本来の読みを大切に辞典では「しゅうじゃく」の方に語義が載っていますが、それ以外の多くの国語辞典では「しゅうちゃく」に語義説明が載っています。現代では「しゅうちゃく」の読みが多くなっている語です。

「重用」も、「じゅうよう」「ちょうよう」どちらの読みもありますが、伝統的な本来の読みは「じゅうよう」になります。「ちょうよう」は「重要」との混乱を避ける意味や「重宝」に引き摺られてなどから始まった慣用読みのようにです。

「執着」も「重用」もどちらの読みもまちがいはありませんので、校正などでは指摘の対象としない方がよいと思います。

26. p14 3. 調査

人名の読み方ですが、作中の登場人物でフリガナがなく調べてもわからない場合は人名辞典で一番多い読み方を採用し、下調べにあて読みと書く処理をしています。今回は著者の「あとがきにかえて」という形でお世話になった編集者やライターの名前がフリガナなしで書かれています。実在の人物ですのであて読みという訳にはいかない場合どうしたらいいでしょうか。

【A】

編集者やライターも実在の人物ですので、調査して書きます。

ネットで調査できる場合も多いですし、音訳の部屋にも編集者の読み方辞典もあります。

<https://hiramatu-hifuka.com/onyak/kotoba-1/henshu/index.html>

調査しても分からない場合は、施設・団体として出版社に問い合わせるとよいと思います。問い合わせに対して返信がないなどの場合は、断って推定読みをすることになります。